
つがいの名前

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つがいの名前

【Nコード】

N7435L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

妻に先立たれた老人が街で見たカップルから教えられたことは。老人の目から見た心温まる恋愛話です。

第一章

つがいの名前

もう妻に先立たれて随分と経っていた。

真鍋力也はすっかり年老いていた。もう八十になろうとしており身体もめっきり弱くなっている。悠々自適の生活であとは死んだ妻の後を追おうというだけだと自分でも思っていた。

娘夫婦と一緒に住んでいて孫や家の犬や猫達の相手をして静かに過ごしていた。他の楽しみといえばテレビを観ること位であった。

時代劇にドラマ、そういうものが好きである。しかし報道関係は見ないのだった。

「ああいう番組は観たら頭が悪くなるわ」

こう言って見ないのだった。温和な顔で言うのであった。

「じゃから観ないでいいのじゃよ」

「新聞だけなのね、それで今も」

「そうじゃよ」

もう初老になろうとしている娘に対しての言葉であった。

「その通りじゃ。しかも新聞は」

「また大阪スポーツ新聞？」

所謂大スポである。あからさまな大嘘を堂々と載せることで有名な新聞である。日本経済新聞と一緒に毎日それを読んでいるのである。

「相変わらずそれ好きね」

「頭の刺激によいからのう」

だから読むというのである。

「読めば笑える」

「まあ普通は宇宙人なんて新聞には出ないわよ」

しかも見ただけで嘘とわかるレベルで出るのである。

「他にも一杯色々な記事あるけれど」

「それがよいのじゃよ。この新聞は」
言いながら読み続けるのであった。

「じゃからな」

「読むのね」

「そうじゃ。さて」

ここで新聞を畳んだのだった。

「そろそろ行くかのう」

「シロのお散歩ね」

「うむ、行つて来る」

家で飼っている犬である。柴犬で毛の色は赤茶色なのだが足が白
いのでそれでシロになったのである。名付け親は他ならぬ彼である。

「それではじゃ」

「車に気をつけてね」

いつもの声をかける娘であつた。

「わかつたわね」

「わかつておるぞ。年寄りには車は大敵じゃ」

「そうよ。わかつてたら余計にね」

「注意しておるぞ。それではな」

「行つてらっしゃい」

こうして家を出てシロを散歩に連れて行く彼であつた。そうして
街を歩く。流石に歳なので少し歩いては休み歩いては休みであつた。
そんなのぞかな散歩をしていた。それで道のベンチに座った。銀
杏の並木道で黄金色の落葉が道を覆っている。彼はそれを見ながら
シロを撫でていた。

「よしよし、ではまたすぐに散歩しようか」

「ワン」

シロは賢く大人しい犬だ。明るい声で彼に応える。そうして今彼
が立ち上がろうとしたその時だ。

右の方から明るい顔をした女の子達が来たのだ。

「あつ、そうだったの」

「そうだったんだ」

何か明るい話をしていた。そうしながら彼の方に來たのであった。

「それで大丈夫だったのね」

「うん、そうだったのよ」

「成程」

「おや」

彼もその女の子達を見た。今時の丈の短いスカートに濃紺のブレザーに青いネクタイという制服である。ソックスは黒や青、白のそれぞれの色だ。

目立つのは中央の女の子だ。黒いショートヘアでにこりとした顔が実に可愛らしい。ソックスは白である。その娘を最初に見た彼だった。

「ほほう、あの娘は」

中々可愛いと思ったのだった。

「いい娘じゃな」

これはルックスを見ての話である。

「善き哉善き哉」

こう如何にも年寄りの言葉を出しながらだった。彼女達を見ているのであった。

「よかったわね、上手くいって」

「ええ」

真ん中のその娘が友人と思われる女の子達の言葉に頷いていた。

「何とかね。上手くいったわ」

「おめでとう、本当に」

「よかったわね」

「テストに受かったのかのう」

力也は彼女達の話を聞きながらそう思った。

第二章

「それかのう」

そうも思うのだった。その間も彼女達の言葉は続く。

そしてそのまま彼の前を通り過ぎていった。その日はそれで終わりであった。

彼はシロを連れて家に帰った。娘は家に帰って来た彼を見てすぐに言ってきた。

「どうしたの？」

「どうしたのとは？」

「顔色が凄くいいけれど」

このことを言ってきたのである。

「凄く。どうしたの？」

「いや、何もないがのう」

それでも彼の顔は今はにこにことしていた。自分でも少しは気付いていた。

「別にな」

「そう。だったらいいけれど」

「それでじゃ」

「ええ。お疲れ様」

「お茶は自分で淹れるぞ」

こう言って台所に向かおうとする。しかしその前に娘の方から言ってきたのであった。

「もう淹れてるわよ」

「何と」

「冷めてるけれどいいわよね」

そしてこうも言ってきたのだった。

「別に」

「そうだったのか」

「さっき飲んだのよ」

「それであるのか」

「そうよ。それでもいいかしら」

「ああ、それでいい」

「構わないと返した力也だった。」

「お茶があるのならな」

「わかったわ。じゃあそれでね」

「うん。それにしても」

ここでさらに言う彼だった。しみじみとした声で。

「あれだな」

「あれって？」

「いや、中々面白い娘に会ったよ」

「面白い娘って？」

「可愛いっていうのかな」

あの道で見た真ん中の女の子のことを言うのである。

「アイドルかな、あれは」

「そういえばお父さん山口百恵のファンだったわね」

「ああ、懐かしいな」

その時のことを思い出して目を細めさせもする。まんざらではない様子である。

「奇麗に引退したな、本当に」

「そうよね。他に河合奈保子も好きだったわね」

「松田聖子も中森明菜もな」

意外とそうした女の子に詳しい彼だった。それもかなりである。

「他には早見優も好きよね」

「今もな。皆好きじゃよ」

「高橋由美子とか深田恭子もよね」

「いいのう」

守備範囲はかなり広いようである。それが窺える今の言葉だった。
「今じゃ誰なの？」

「モーニング娘。もいいし松浦亜弥も好きじゃな」

「成程」

「AKB48もいい」

目を細めさせた言葉だ。とにかくアイドルが好きなようである。

「そうそう、今はやっぱり北乃きいが一番じゃな」

「そのきいちゃんにそっくりだったの？」

「また違う」

あの娘は確かに別のタイプだった。そのことを今思い出すのだ。た。

「じゃが可愛かった」

「そんなに可愛かったの」

お茶を持って来ながらさらに問う娘だった。そのことをだ。

「その娘って」

「うむ。本当に何処かの事務所に所属していてもおかしくはない」

「ふうん、そんなに」

「さて、明日も会えるかな」

お茶が入ったその湯飲みを手に取りながらの言葉だった。そのお茶はやはり冷めていた。そのお茶を美味そうに飲みながら話をしていた力也だった。

第三章

次の日もその道のベンチに座るのだった。やはり散歩がてらでシロを連れてである。

「来るかのう」

彼女を待ちながらの言葉である。

「果たして」

暫く待っているとだった。来た。

「おお、来た来た」

「今日はとうだったの？」

「携帯のメアド交換したの」

また三人で横に並んで道を歩いていた。そして真ん中にも昨日と同じだった。

「今日はね」

「そう。よかったじゃない」

「うん、これで何時でも連絡できるわ」

こんな話をしていた。力也はそれを聞いて笑顔になっていた。

「おお、今日も来たのう」

彼女を見ながら目を細めさせるのだった。

「いいのう、また」

「それじゃあ今度はね」

「今度は？」

「さらに一歩進みなさい」

そうしろと彼女に言うのだった。

「もつとね」

「もつとなのね」

「常に前進あるのみよ」

「そうそう」

左右にいる友人達が彼女に話していた。

「こういう話はね」

「わかったわね」

「そうなの。前進なの」

話を聞いてまずは目をしばたかせる彼だった。

「こういうことは」

「そうよ。退いたら駄目よ」

「一步後退しても二歩前進するものよ」

そうするべきだというのだ。彼女達の言葉では。

「奈々、あんた顔いいんだし」

「性格も真面目で親切だし」

「ほう、奈々というのか」

力也はその話を聞いて彼女の名前を頭の中に入れた。その名前と顔を見ると確かに合っている。そのことを頭の中で確かめるのだった。

「あの娘は」

「胸だって大きいし」

「絶対にいけるよ」

「大丈夫大丈夫」

そんな話をしながら彼の前を過ぎ去っていく。歩き方も若々しく澁刺とした感じだ。それもまた力也の目を微笑まさせるのだった。

この日も彼女を見て満足した。そして名前も覚えたことにさらに満足していた。

「奈々さんというのか」

その名前を家に帰って呟くのがあった。

「いい名前じゃのう」

「奈々って？」

また娘が彼に問うてきた。

「誰のこと？それって」

「いや、何でもない」

こう言って今は答えない彼だった。

「何でもな」

「そうなの。ああ、お茶は」

「またさっき飲んだのか」

「紅茶をね。飲んだのよ」

「紅茶をか」

「お父さん紅茶も好きよね」

このことを父に対して問うのだった。

「紅茶も」

「大好きじゃ」

そのままありのまま答えたのだった。

「とてもな」

「そう。じゃあ」

「悪いな、持って来てくれて」

その紅茶を受け取る。白いティーカップの中のそれをゆっくりと飲みながらそのうえで話す彼だった。

第四章

「いや、いい名前じゃ」

「そうね。猫の名前にいいわよね」

「何でそこで猫なのじゃ」

「あれ、また一匹貰うって言ってなかったかしら」

「今聞いたぞ」

本当に初耳だった。その老いた目を思わず動かしてしまった。

「そんなことは」

「けれど本当よ」

しかし娘はこう言うのである。

「それはね」

「もう一匹か」

「女の子なのよ」

その猫の性別のことも話されるのだった。

「だから奈々っていい名前よね」

「人間の名前なんじゃが」

「けれど猫の名前にもいいじゃない」

それも言う彼女だった。

「そうでしょ？だからね」

「いいのか」

「そうよ。じゃあそれで決めたわ」

父のことをよそに決めてしまったのであった。

「奈々ね。いい名前ね」

「全く。妙なことになったのう」

「全然妙じゃないわよ」

しかし娘はばやく父にこう告げた。

「全然ね」

「そうかのう」

「そうよ。それにお父さんも別に悪い気はしないでしょ」

「まあそれはな」

言われるとその通りの力也だった。

「猫も好きじゃからのう」

「じゃあいいじゃない」

そういうことにしてしまおうという娘だった。

「それでね」

「しかしその名前は」

名前についてはまだ言う彼だった。

「ちよっと止めた方がいいじゃろ」

「何でなの？」

「いや、それはじゃな」

そう問われると少し困ってしまうのだった。まさかあの娘のことを言うわけにもいかない。だからどうしても困ってしまうのだった。

「まああれじゃよ」

「あれって？」

「人の名前じゃからな」

「猫にも多い名前じゃない」

しかし娘はそんな事情を知らないのでこう返すのだった。

「だからいいじゃない」

「ううむ。どうしてもか」

「女の子だしいいのよ」

また言う娘だった。

「それでね」

「そうか。まあそこまで言うのならな」

納得するしかない彼だった。言える事情でもなかったからだ。それで今はただ紅茶を飲むだけだった。紅茶を飲みながら手元にあった雑誌を読むとだった。

「ふうむ」

「どうしたの？」

「いや、面白いことが書いてあったぞ」

「面白いことって？」

「いや、猫のことじゃがな」

実際に猫のことだった。それを読むと猫のつがいを貰った時に人の恋人同士の名前をつけるとそれでいいことがあるというのである。そのいいこととは。

「実際の人のカップルの名前を付けるとじゃ」

「人の名前を？」

それを聞きながらも服を畳んでいる娘だった。主婦も何かと忙しいのである。

「そうじゃ。彼氏と彼女のじゃな」

「そうしたらどうなるの？」

「何でもそのカップルは何時までも幸せになってそしてその猫のつがいもお互いに長生きするそうじゃ」

「いいこと尽くめじゃない、それって」

「そうじゃろう。つがいではないのじゃな」

このことをあらためて問う力也だった。

第五章

「その貰って来る猫は」

「ああ、そういえば」

「おるのか？」

「もう一匹雄の猫ちゃんがいるって言ってたわ」

このことにも答える娘だった。

「確かね」

「ではそれを貰うのかのう」

「つがいね。まあいいかもね」

それを聞いて頷くところおある彼女だった。

「それだと」

「しかしつがいだと彼氏彼女が」

「そうね。それね」

そんな話をするのだった。そうしてまた次の日だった。またシロを連れて散歩してあの道のベンチに座っていた。するとまたあの娘が来たのだった。

「また来たのじゃな」

奈々だった。ただし今日は一人ではなかった。

その隣には爽やかな顔をした端整な少年がいた。

黒い髪を左で分け適度な太さの整った眉を持っている。すっきりとした顔立ちが実にいい。背はかなり高く奈々とはそれこそ二十センチ以上違う。そんな若者だった。

見れば青い詰襟の制服を着ている。力也はそれを見てすぐにわかった。

「そうか。彼氏か」

「あの、高本君」

「譲二でいいよ」

その若者は笑顔で彼に言っていた。彼が右、そして彼女が左であ

る。

「それでね」

「名前でいいの？」

「いいよ。だって僕達あれじゃない」

「あれって？」

「こう言ったら何だけれど」

言葉を一旦前置きしてからまた言う彼だった。

「ほら、彼氏と彼女になったし」

「だからなのね」

「そうだよ。それでね」

いいというのだった。

「名前で呼んでくれないかな」

「そうね。じゃあ」

奈々はそれを言われてだった。彼も顔を上げてそれに応える。そうして言うのだった。

「私も」

「私も？」

「名前で呼んでくれるかしら」

こう言うのだった。

「私も名前でね」

「名前でなの」

「それでお互い様よね」

それが奈々の提案だった。

「だから。それで」

「うん。じゃあ」

「呼んでみて」

奈々から言った。そうして譲二はそれに応えて。

「奈々ちゃん」

「譲二君」

にこりと笑って言い合う二人だった。まずはそれからだった。

「何か恥ずかしいけれど」

「それでもね。いい感じだね」

「そうね。何か」

微笑み合いながら二人でお互いの名前を呼び合っていた。力也はそんな二人をずっと見ていた。二人は気付いていなかったが見ていたのだ。

「そうじゃな」

その二人を見て気付いたのだった。そのことにだ。

第六章

そうして家に帰る。家に帰るともう猫が二匹増えていた。可愛らしい虎猫が二匹いた。首輪までされている子猫達である。

「もう来たのじゃな」

「そうよ」

素っ気無く彼に返す娘だった。

「思ったより早く来てね」

「そうだったのか」

しかもであった。彼は二匹なのを見てまた言った。

「つがいになったんじゃな」

「そうよ。別にいいわよね」

「うむ。いや」

「いや？」

「かえっていいことじゃ」

こう返すのだった。

「別にな」

「そうなの」

「それでじゃ。どうじゃ？」

あらためて問い返しそのうえでの言葉だ。

「名前は」

「そうね。名前ね」

「つがいじゃし」

そうしてここで彼が思い浮かんだ名前は。

「譲二と奈々でどうじゃ」

「譲二と奈々？」

「そうじゃ。それでどうじゃ」

その名前を出すのだった。

「それでじゃ」

「何でその名前なの？カップルの名前よね」

昨日の話だった。人のカップルの名前を猫達に付けるとカップルは何時までも幸せに過ごせて猫達もそれぞれ長生きできると。そうなるというのだ。

「それって」

「そうじゃが。どうじゃ？」

「何かね」

「何か？」

「いいとは思わよ」

こう言うのだった。

「それでね」

「そうか。それではじゃ」

「けれどお父さん」

娘はここで父に問うた。

「どういう風の吹き回しなの？」

「どういったとは？」

「昨日は猫に人の名前付けるの反対してたじゃない」

彼女は昨日の話をusstしてきた。

「そうだったじゃない。それがどうして」

「だから幸せを祈ってじゃよ」

娘と同じく昨日のことを話に出してみせた。

「だからじゃよ」

「昨日のね」

「それでじゃが」

「幸せね。それを願う人ができたのね」

それを聞くと話を察した娘だった。中々鋭いところがあるようだ。

「成程ね」

「ではそれでいいのう」

あらためて娘に尋ねる彼だった。

「それで」

「別にいいわ。じゃあ男の子が譲二で」

まず彼の名前が決まった。

「それで女の子が奈々。それでいいわね」

「うむ。それでいい」

満足した顔で頷くのだった。それから彼はベンチで二人を見守るのだった。子猫達の成長と共に。それぞれ幸せに過ごしていったのを見届けたのだった。

つがいの名前

完

2009・12・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7435/>

つがいの名前

2010年10月8日14時49分発行